指導と調教は、違う！！！

ある障害児の通所施設に勤務するメル友から、メールが届いた。

ある利用者が他の利用者とのちょっとした行き違いをきっかけに、物凄い奇声をあげ周りの利用者にまで手を出し、その場に自分しか居なくて一人で止めようとしたが自分より体が大きいだけに、噛みつかれ、殴られ、けとばされ、突き飛ばされ、一時意識がなくなり、すぐ病院に搬送されるほどのケガをしたとか。

この子どもは、時々パニックを起こし、その度に職員、２、３人に強く抑制されているとか。

普段は、メル友を慕って施設内を探し回り、ちょっと疲れた顔をしていれば「どうしたの？」と優しく声をかけてくれるとか。他の職員にはそうした声かけはしていないとか。

他の職員は、「私達には、暴れないし言うことも聞く」と自慢し、今回のことも「自己責任だ！」と、日頃の子どもへの係わり合い方を強く否定されたとか。

確かに、他の子どもに危害を与えそうな時は、緊急避難的に抑えざるを得ないことは解るが、日頃から気持ちを表に出せず抑えてるから、時々パニックを起こすのであり、そこの視点からの日頃の係わり合い方を検証せず、「言うことを聞く」とは、単に恐怖心を抱かせているだけでないのかなあ。

指導と調教とは、違いますよね。

こうした指導と調教の勘違いかなと思う事例は、よく耳にする。

例えば、学童保育のスタッフから聞いたが、見学に来た担任教師の姿をちらっと見ただけで、子どもの表情が強ばり、行動が固まってしまったとか。日頃、学校でこの教師はどういった係わり方をしているのやら…。

逆に、何を育むかを考えず、ご褒美という餌を与えることを指導と勘違いしている話も耳にする。

こうした大人側の視点からだけでは、子どもの中に、行動を変容する力が育まれることはないと思う。

メル友は、Dr から入院を勧められる程のケガであったにも拘わらず、「その子がなぜそうするのか？という事を日頃全く気にかけてない職員……。その子に何をしてあげられるか。今回、自分の知識や、その子についての力不足が情けなく、なんとか良い方法はないかと悔しさで一杯です。」とメールにあった。

福祉や教育の現場では、メル友のように子どもの目線で常に自らを検証・工夫実践しようとする人は、孤独になりがち。

せめて、職場内に思いを同じくする同僚が数人いれば、励まし合うことも可能なのだか……。

（2006 年 8 月 31 日　記）